

雨の情景

——陳與義の詠雨詩と杜甫——

緑川英樹

京都大學

はじめに

吉川幸次郎はその著『宋詩概説』において、唐人の詩には激情をおおるものとして、夕陽と月という二つの自然がしばしば現れるのに對し、宋人の詩に多く現れるのは雨であると指摘する。いわく、「夕陽は燃焼であり、雨は持續である。唐宋詩の差異を示す、また一つの材料である」^①。

これは單に特定の自然景物に對する偏愛といった題材論的な次元にとどまらない。吉川氏のことばを借りるならば、「人生を長い持續と見る。長い人生に對する多角な顧慮がある。巨視がある」^②。宋人の人生觀、哲學に關わるものである。

雨の情景（緑川）

り、その文學的な表れとして、唐詩は激烈を、宋詩は平靜を獲得しているという。

確かに宋代の詩人たちは好んで雨を詩にうたう。たとえば、北宋を代表する詩人蘇軾（一〇三六—一一〇一）には「山色空濛として雨も亦た奇なり」（飲湖上初晴後雨二首）^③其二など、雨にまつわる印象的な佳篇が少なくないし、また雨を題材とした作品の數量、多様性という點では、南宋の陸游（一一二五—一二〇九）と楊萬里（一一二七—一二〇六）に指を屈することができよう。彼らがいかに雨を表現したかについては、すでに個別的な研究も幾つかあり、それぞれの作品世界を構成する重要な要素であることが指摘されている。

傳統的な文學論に眼を向けてみれば、元・方回（一二二七—一三〇七）が編んだ律詩専門のアンソロジー『瀛奎律髓』卷一七には、つとに「晴雨類」が立てられ、次のような論評が加えられている。

老杜晴雨詩取二十首、似乎太多、然他人無此等氣魄。

學者但觀老杜・聖愈・後山・簡齋四家賦雨其弘大、其工密、其高爽爲如何、即知入處矣。

老杜の晴雨の詩 二十首を取るは、^{はな}ただ多きに似たり、然れども他の人には此等の氣魄無し。學ぶ者は但だ老杜・聖愈・後山・簡齋四家の雨を賦するに其の弘大、其の工密、其の高爽なること如何と爲すかを觀れば、即ち入處を知らん。

〔瀛奎律髓〕卷一七・晴雨類 杜甫「雨四首」其三、方回評）

「晴雨類」は、「雨」のみならず「晴」、すなわち雨上がりの晴れた情景も對象に入れて、廣い意味で雨をうたう詩と見なしてさしつかえないだろう。方回は、五言律詩では唐代の杜甫（七二一七七〇）二十首、北宋の梅堯臣（一〇〇二一一一〇六〇、字は聖愈）十三首、陳師道（一〇五三一一一一〇一、號は後山居士）七首、そして南宋の陳與義（一一〇九〇—一一三八、號は簡齋）十九首を選び、彼ら四人による雨の描寫を高く評價する。そのうえで、各詩のスケールの廣大さ、精巧緻密、高潔爽快な表現を見極めることに

よつて、詩道を悟るための第一歩になるであろうと説く。なお、「入處」は禪家愛用の語。「入頭處」ともいい、悟入への手がかりのこと。

同卷の陳與義「雨」詩の方回評には、さらに「簡齋の五言律 雨の爲にして作る者、十九首を選ぶ。詩律精妙にして、上は老杜に迫り、高きを仰ぎ堅きを鑽る。世の斯文もて自ら命ずる者は、皆な當に下風に在るべし。後山の後は、此の一人有るのみ」とあり、陳與義の雨をうたう詩を方回は意識的に多く選び、それを「杜甫↓陳師道↓陳與義」という系譜のなかに位置づけていることがわかる。

七言律詩になると、杜甫から四首、陳與義から六首を探り、同様に彼ら二人の詩を重視していることが窺えるものの、梅堯臣は無し、陳師道はわずか一首のみと、五言律詩の場合とはいささか趣を異にする。陸游の七首を採っているのが目を引くが、楊萬里は五言・七言ともにまったく選録されない。

むろん、このような方回の論評は彼獨特の、多かれ少なかれ偏向した詩學觀にもとづくものであり、その説の當否

については、具體的な作品分析に即して、あらためて検証してゆく必要があるだろう。ただし、少なくとも今回の批評眼によれば、陳與義の雨をうたう詩が唐宋詩の歴史において重要な位置を占めることは疑いない。

本稿では、陸游・楊萬里よりも一世代前の詩人、すなわち北宋末から南宋初にかけて活躍した陳與義の雨をうたう詩——かりにこれを「詠雨詩」と名づける——を取り上げ、特に杜甫からの影響關係に焦點を當てて考察してゆきたい。それは方回の論評を検證すると同時に、ひいては吉川氏の述べる宋人の人生觀、哲學をも視野に入れることになるだろう。なお、ここでいう「詠雨詩」とは、直接に雨を主題とする詩を主とし、あわせて題材もしくはライト・モチーフ（主導動機）として部分的な雨の描寫を含む作品群を概括するという。

一 「苦雨」「喜雨」から詩作を催す雨へ

陳與義の詠雨詩の考察に入る前に、まず詩における雨について簡単に整理し、その歴史的な展開を概観しておこう。

雨の情景（緑川）

中國古典文學において雨が描かれるのは古く『詩經』『楚辭』にまで溯ることができるが、雨そのものを主題とした作品の登場は後漢末から魏晉の時期まで待たなければならぬ。多くの場合、その内容は農事や物候に關するものであり、凶作の原因となる長雨を愁うか、あるいは逆に豐作をもたらす恵みの雨を喜ぶという立場からうたわれる。前者の例としては、後漢・蔡邕「霖雨賦」、魏・曹丕や曹植らの「愁霖賦」、さらに魏・阮瑀の詩（『古詩紀』卷一七には「苦雨」と題する）、晉・傅玄の詩（『古詩紀』卷二二には「苦雨」と題する）、傅咸「愁霖詩」（『太平御覽』卷一一）など。後者の例としては、曹植「喜雨詩」、傅咸「喜雨賦」などが今に傳わる。『文選』卷二九に收める晉・張協「雜詩十首」其十は、神話的な想像力を驅使して降雨による世界秩序の崩壞を描いた特異な例と言えようが、あくまでも「苦雨」の枠組から外れることはない。⁵⁾

以後、六朝期を通じて、雨を主題とする詩賦は基本的に「苦雨」か、さもなければ「喜雨」という悲喜いずれかの觀念にもとづいてうたわれるのが主流であった。その一方、

南齊・謝朓「觀朝雨」詩（『文選』卷三〇）、梁・劉孝威「望雨詩」のごとく、雨そのものを細やかに觀察し、そこに喚起される思念や情緒をうたう「觀雨」「望雨」あるいは「對雨」と題される作品も徐々に増えてゆく。梁の簡文帝蕭綱「賦得入階雨詩」、元帝蕭繹「詠細雨詩」などは、詠物詩として雨の美しさを描寫した最たるものと言えよう。多雨濕潤という中國南方特有の氣候條件が及ぼした影響も否めないが、南朝の修辭主義的な文學潮流のなか、従前さほどうたわれなかった「微雨」「細雨」など、朦朧とした雰圍氣や雨音の聽覺的側面を描き出す題詠の作が多く現れたことは注目に値する。ことに梁代以降、その傾向は顯著になる。^⑥

上に舉げた雨を主題とする作品のほとんどは『藝文類聚』卷二・天部・雨に收載されており、農事や物候と密接につながる「苦雨」「喜雨」の系譜であれ、南朝後期になつて新たに現れた「觀雨」「望雨」「對雨」の系譜であれ、少なくとも初唐以前の時期に、「詠雨賦」「詠雨詩」が一つのジャンルとして、すでに確乎たる地位を占めていたこと

を裏づける。

さて、唐代の杜甫になると、詩における詠雨表現は質量ともに新たな展開を見せる。第一に、雨を主題とした詩を多數かつ集中的に創作していること。「雨」字を詩題に含む作品だけでも五十三首、そのうち「雨」一字を取つてそのまま詩題とした作品も十二首にのぼる。もちろん、清・喬億『劍谿說詩』卷下（『清詩話續編』）に「唐人 題を製ること簡淨、老杜の一字二字もて拈出するは、更に古なり」と述べるように、篇首の一字あるいは二字を機械的に摘んで詩題とするのは『詩經』の古風なスタイルに倣つたものである。詠じられる雨そのものにさほど深い意味がないこともあるし、逆に詩題に「雨」字を含まずとも、雨が作品において重要な役割を果たすこともありうる。あくまでも目安としての集計ではあるが、詩の本文中に「雨」字が現れるのを合わせると計二百三十首、現在のこのつている杜甫のすべての詩一千四百餘首のほぼ六分の一近くにも達する。この出現頻度の高さは唐代の他の詩人に比しても群を抜いており、杜甫は雨そのものを表現對象とすることに

竝々ならぬ關心を抱いていたと言つてよい。

第二に、杜甫を嚆矢として、雨が詩作を催す、詩人に靈感をもたらすという詩學認識が自覺されたことである。杜甫の若い頃の五律「陪諸貴公子丈八溝携妓納涼晚際遇雨（諸貴公子の丈八溝に妓を携えて涼を納るるに陪し、晚際にて雨に遇う）二首」其一（清・仇兆鰲『杜詩詳註』卷三。以下、「詳註」と略す）^⑦に、すでに次のような發言が見える。

片雲頭上黒　片雲　頭上に黒し

應是雨催詩　應に是れ雨の詩を催すなるべし

詩題の「丈八溝」は長安南郊にあつた運河。夏の夕暮れどき、貴族の若者たちと美しい妓女たちが舟を浮かべて納涼の宴に興じる様子をうたう。杜甫は詩作を披露する陪客の立場として、この華麗な集いに加わつたのだらうか。上に引いた末尾二句では、頭上に黒い雨雲がかかり始めてきたが、それはきつと雨がわたしに詩を作れと催促しているにちがいない、とユーモラスに詩を結ぶ。宴席即興の輕妙

雨の情景（綠川）

な筆致ではあるものの、これ以降、雨を主題とする詩を幾度となくうたいつづける杜甫の創作姿勢を、はしなくも暗示している句と言えよう。この詩では、雨が降り出す前に詩を急いで作ろうとする思いを擬人的に表現したに過ぎない可能性もあるが、北宋になると、「雨　詩を催す」は本來の文脈を離れ、詩作の動機となる雨、詩人に靈感をもたらす雨という意味合いが明確になってゆく。杜甫は、宋人に先驅けて、これに近い認識を持つに至つたのである。

章を改め、杜甫の詠雨詩の表現について具體的に考察したい。

二 杜甫の詠雨詩

杜甫の詠雨詩で最も注目すべきは、從來のものとは比べ、内容上および表現上の創新が認められることである。本章においてその多彩な全貌をつぶさに論ずることはもとより不可能であるが、ここで特筆しておきたいのは、杜甫の場合、「苦雨」「喜雨」という二つの枠組を踏襲しつつも、農事や物候の範圍を超えて、戦亂などの時事問題、ひいては

社會全體まで射程に捉えているという點である。典型的な例として、五古「喜雨（雨を喜ぶ）」（「詳註」卷二二）を取り上げてみよう。

春旱天地昏 春旱 天地昏く

日色赤如血 日色 赤くして血の如し

農事都已休 農事 都已に休す

兵戎况騷屑 兵戎 況んや騷屑たるをや

5 巴人困軍須 巴人 軍須に困し

慟哭厚土熱 厚土の熱きに慟哭す

滄江夜來雨 滄江 夜來の雨

眞宰罪一雪 眞宰 罪 一たび雪ぐ

穀根小蘇息 穀根 小しく蘇息するも

10 沴氣終不滅 沴氣 終に滅せず

何由見寧歲 何に由りてか寧歲を見

解我憂思結 我が憂思の結びたるを解かん

崢嶸群山雲 崢嶸たり 群山の雲

交會未斷絶 交會して未だ斷絶せず

15 安得鞭雷公 安くんぞ得ん 雷公に鞭うちて

滂沱洗吳越 滂沱として吳越を洗うことを

原注に「時に聞く 浙右に盜賊多し」とあり、台州（浙江省臨海市）の人、袁晁が叛亂を起こして浙東地方を陥れた情況を背景としてうたう。事は『舊唐書』代宗紀などに見える。寶應二年（七六三）四月には河南副元帥の李光弼が袁晁を討伐していることから、清・朱鶴齡『杜工部詩集輯註』卷一〇はその直前、すなわち同年春の作とする。當時、杜甫は成都をしばらく離れ、梓州（四川省三臺縣）に滞在していた。

冒頭六句では、春の旱魃のため、當地の人びとは農業被害に遭っているばかりか、戦局の悪化にともない、叛亂軍の鎮壓に必要な軍需物資の供給のためにも苦しんでいるという。幸いにも昨夜からの雨が降り、旱魃をもたらした造物主の罪は一氣にすすがれ、作物の根もしばし息を吹き返すことができたようであるが、結局のところ、「沴氣」（災いなす氣）は消滅していない。同じ杜甫の「喜雨」でも、

人口に膾炙した「春夜喜雨（春夜 雨を喜ぶ）」詩（『詳註』

卷一〇）とは異なり、この詩は春雨の恵みを手放しに禮贊するものではない。むしろ「喜」びながらも、「憂思」は依然として結ばれたまま。

末尾二句は、自身のいる巴蜀から遙か吳越の地へと想像を馳せ、どうにかして雷神に鞭打って大雨をざんざんと降らし、浙東一帯の叛亂軍をすべて洗い流したい、と杜甫らしい奇想をもつて詩を結ぶ。末尾の部分に「安得」を用いて切實な願望をこめるのは杜甫にしばしば見られる句法であり、「安くんぞ得ん 廣廈の千萬間なるを、大いに天下の寒士を庇いて俱に歡ばしき顔せん」（茅屋爲秋風所破歌、『詳註』卷一〇）など、彼自身の誇大妄想的な濟世の思いを表現することが多い。また、大雨によって戦争の終結を願うという發想としては、乾元二年（七五九）春の作、七古「洗兵馬」（『詳註』卷六）にも同様の例が見える。

安得壯士挽天河 安くんぞ得ん 壯士 天河を挽き
淨洗甲兵長不用 淨らかに甲兵を洗いて 長えに用

雨の情景（緑川）

いざるを

「甲兵」（よろい、武器）の汚れを洗い去るとするのは、周の武王が殷を討伐した際に大雨が降ったことを「天 兵を洗うなり」と述べた故事にもとづくが、杜甫はこれを未來のことに反轉させて用い、大雨の力によってこの世界から戦争を消滅させたいと夢想する。「喜雨」詩の「滂沱として吳越を洗う」もこの方向で讀まれるべきであり、傳統的な「喜雨」の型を踏まえつつも、「農事」から「兵戎」、社會全體の問題にまで憂患の對象を推し廣げているところに杜甫の詠雨詩の特徴があるだろう。

先行作品に見られない雨に對する繊細鋭敏な感覺など、杜甫の詠雨詩について論ずべきことはなお少なくないが、後述の陳興義との關わりにおいて特に重要な作品として、次に五律「西閣雨望」（『詳註』卷一七）を檢討したい。

樓雨霑雲幔 樓雨 雲幔を霑し
山寒著水城 山寒 水城に著く

逕添沙面出 逕添こみちえられて沙面出で

湍減石稜生 湍減はぶせじて石稜生ず

菊蕊凄疎放 菊蕊 凄として疎放

松林駐遠情 松林 遠情を駐とどむ

滂沱朱檻濕 滂沱として朱檻うるわ濕い

萬慮傍簷楹 萬慮 簷楹に傍そう

「西閣」は、夔州（重慶市奉節縣）における杜甫の寓居。

「西閣 百尋餘」（「中宵」詩、『詳註』卷一七）とあるように、樓閣が白帝山の西の中腹に高く聳えていた。そこから見た雨の眺めをうたう。五年にわたって逗留した成都を離れ、長江を下つてこの水邊のまち夔州にたどり着いたのは大曆元年（七六六）、杜甫五十五歳のこと。この地で西閣を題材にした詩を十首以上のこしている。掲出した詩は從來あまり取り上げられることがないけれども、先に見た社會全體に對する憂患意識がより象徴的な表現によつて純化されている點において、極めて注目すべき作品だと思ふ。

中間二聯のうち、領聯は山川の水かさが減り、沙の表面

や岩の稜角が露出した状態をいうのだから、舊注の解釋はいずれも曖昧ではつきりしない。宋代の類似する着想として、歐陽脩「醉翁亭記」に「風霜高潔に、水清くして石出づる者」、蘇軾「後赤壁賦」に「水落ち石出づ」という有名な句と照らし合わせるならば、秋から冬にかけての寒々とした水邊の景を表象したものと解することができようか。南宋・趙次公注（『九家集注杜詩』卷三二所引）はこの二句を「奇語と謂うべし」と評するが、それは單に小徑が「添」えられ、早瀬が「減」ずる、といった措辭の異様さではなく、むき出しのまま呈示された荒涼たるイメージに反應した感じ方なのかもしれない。

領聯が水邊の景を描くのに對し、つづく頸聯では山邊に眼を轉ずるが、詩の後半部になるとそれまでの情景描寫から心情表現へとスライドしてゆく。「菊蕊 凄として疎放、松林 遠情を駐む」は、表面的にはもちろん、雨に打たれて黄色い菊の花がまばらに咲き、雨に包まれながら青々とした松の林が情趣を留めているという仇兆鰲の解釋¹²に従つてよいだろう。と同時に、この二句から不變の節操を守り

抜く高潔さの象徴を讀み取るべきではないのか。つまり、菊の花と松の林は『楚辭』離騷や陶淵明の詩、『論語』子罕などを引くまでもなく、ただに屬目の景というにとどまらず、杜甫の人格形象を反映させたダブルイメージとなっているのだ。「疎放」の語も、菊の花が少し開いていることと、本質的には菊花のごとく高潔でありながら、「疎放」な杜甫自身の性格とを重ね合わせていると考えられる。實際、杜甫はみずから「疎放」な人間だと客觀視し、そこに開き直ろうとする。たとえば七律「狂夫」(『詳註』卷九)にいう、

欲填溝壑惟疎放　溝壑に填めんと欲して　惟だ疎放
自笑狂夫老更狂　自ら笑う　狂夫　老いて更に狂す
るを

清・錢謙益が晉・向秀「思舊賦序」(『文選』卷一六)の「嵇(嵇康)は志遠くして疎、呂(呂安)は心曠くしてほいまま放なり」を語の出典として説明するように、野放圖で

雨の情景(緑川)

物にこだわらない性格、それゆえ俗世間とは相容れず、最後は野垂れ死にしそうな運命を招くであろうことを自嘲して述べている。

あるいは最晩年の五古「次晚洲(晚洲に次る)」(『詳註』卷二二)にも、

羈離暫愉悅　羈離　暫らく愉悅し
羸老反惆悵　羸老　反つて惆悵す
中原未解兵　中原　未だ兵を解かず
吾得終疎放　吾　疎放に終わるを得たり

と見える。^⑭最後の一句について、趙次公注(『九家集注杜詩』卷一六所引)は「兵未だ解かざれども疎放を得たるは、世に用いられざるを以てなり」とする「舊注」の説を退け、「正に時の擾擾たるを傷めば、吾　豈に終に疎放たりて憂懼せず、且つ流落するを得んや」と反語に讀むことを主張する。鈴木虎雄も「中原未だ兵を解かず、吾終に疎放なることを得むや」と訓讀して同様の解釋を取るが、^⑮いささか

理に落ち過ぎではないか。ここは、北方でつづく戦亂に對して何もなし得ない不甲斐なさを杜甫自身は痛いほど理解しつつも、湖南の地に漂泊したまま終わるであろう我が人生を、「疎放に終わるを得たり」と絶望的なまでに開き直った句として讀みたい。こうした杜甫の自己認識は「西閣雨望」詩にも投影していると思う。

かりに如上の方向で解釋することが許されるならば、尾聯の「滂沱」についても、西閣に降り注ぐ雨の激しさの形容というだけでなく、明・王嗣奭のように「滂沱たること羈客の涙の如し」と讀むことも十分可能であろう。とすれば、この詩はあたかも自己と外界とが相互に照應 (Correspondances) し合う泰西の象徴詩のように、杜甫の形象を雨の情景のなかに祕やかに融けこませた作品と云うことができる。——「巷ちまたに雨の降るごとく／わが心にも涙ふる／かくも心にも入る／このかなしみは何やらん？」(ヴェルレーヌ「忘れた小曲」その三、堀口大學譯)。

西閣の軒下の柱にもたれながら湧き起る「萬慮」、くさぐさの思いとは何か。恐らくは同時期の「西閣夜」詩

(『詳註』卷一七)に「時危うくして百慮に關す、盜賊なげ爾は猶お存せり」とうたわれる當時の戦亂情況に對する憂慮を指すのであろうが、この詩において杜甫は敢えて何も明示しない。前掲「喜雨」詩のように具體的な時事をそのまま悲しみ歎くことはないし、個人的な感懷さえも、すべて雨のなかに包みこんでしまう。かくも極度に象徴化された雨の世界を、晩年の杜甫は詩において創造してみせたのである。

三 陳與義の詠雨詩

次に、杜甫を去ること三百数十年ののち、北宋南宋の交に生きた陳與義の詠雨詩について論述し、兩者の影響關係を検證したい。まず、陳與義の履歷を簡単に紹介しておく。

陳與義、字は去非、號は簡齋。洛陽の人。政和三年(一一三)、太學の上舍甲科に及第し、開德府教授などを經て太學博士に遷る。「和張規臣水墨梅(張規臣の水墨梅に和す)五絶」(白敦仁『陳與義集校箋』卷四。以下、『校箋』と略

す)¹⁷⁾によつて徽宗にその詩才を歎賞され、祕書省著作佐郎となる。若い頃は、官僚・詩人として比較的順調な歩みを重ねていたが、宣和六年(一二二四)、時の宰相王黼の失脚にともない、累が及んで監陳留酒稅に貶謫される。靖康元年(一二二六)、三十七歳のときに靖康の變が勃發、金軍の侵攻によつて北宋の都、汴京(河南省開封市)が陥落するや、陳留にいた陳與義も亂を避け、商水、舞陽、南陽など河南の地を轉々とした。宋室南渡ののちも居所定まらず、南のかた岳州(湖南省岳陽市)、潭州(湖南省長沙市)、さらには廣西、廣東、福建を流浪していたが、紹興元年(一一三二)、臨安府(浙江省杭州市)に據る高宗の政府に召され、中央政界への復歸を果たす。その後、中書舍人、翰林學士・知制誥などの要職を歴任、紹興七年には參知政事に至るも、ほどなくして病沒。享年四十九。

宋末元初の方が『瀛奎律髓』において江西詩派の旗幟を掲げ、杜甫を「一祖」とし、黃庭堅・陳師道と並べて陳與義を「三宗」の一人に列ねたことはよく知られており、¹⁸⁾現在でも、陳與義を江西詩派の重要な詩人と見なすのが一

雨の情景(綠川)

般的である。これに對し、「陳與義は江西詩派とさほど似ておらず」、方が「金持ちと結婚して親戚關係を結ぶように」、江西詩派の權威を高めるために陳與義を仲間に入れたものであり、「後世の文學史家の耳目を惑わすことになった」とする異論も提起されている。¹⁹⁾

陳與義を江西詩派に歸屬せしめることが果たして妥當か、黃庭堅・陳師道の忠實な繼承者と言えるのか、さらには宋末元初の詩壇はいかなる情況だったのかなど、それ自體、極めて重大な問題であるが、いずれにせよ、陳與義が杜甫を作詩の典範とする大きな潮流のなかにいたことは確かである。しかも、靖康の變という衝撃を受けた當時の詩人たちは、各地を放浪し、亂離を経験する過程で、杜甫の詩に描かれた安史の亂後の境遇や情感を我が身と重ね合わせるようになる。陳與義もまた例外ではなく、それは彼が生涯にわたって作りつづけた詠雨詩にも明確に現れている。

以下、陳與義の詠雨詩について、靖康の變による南渡の前と後の時期に分けて考察を進めてゆこう。²⁰⁾ 論述の便宜を圖るべく、本稿末尾に、陳與義の作品のなかから詩題に

「雨」字を用いる詩、および『瀛奎律髓』卷一七・晴雨類に収録される詩を抽出し、それらを制作時期の順に並べた一覽表を附したので、あわせて参照されたい。ちなみに、杜甫の詠雨詩との數量上の比較を示すと、「雨」字を詩題に含む作品が四十一首、本文中に「雨」字が現れる詩を合わせると計一百三十四首。陳與義の全詩六百二十餘首の實に五分の一に達し、その頻度は杜甫をも上回る。

(一) 南渡以前

靖康の變が起る前に陳與義が作ったと考えられる詠雨詩は、およそ十六首ある。杜甫からの影響という視點で見ると、意識的に杜詩を典據に用いた例が多いことに氣づく。たとえば、七律「連雨不能出有懷同年陳國佐(連雨 出づる能わず、同年の陳國佐を懷う有り)」(『校箋』卷四)はその最も極端なもので、あたかもパズルのピースを組み合わせるように、杜甫の詠雨詩を寄せ集めて作っている。

雨師風伯不吾謀 雨師 風伯 吾を謀らず

漠漠窮陰斷送秋 漠漠たる窮陰 秋を斷送す
欲過蘇端泥浩蕩 蘇端に過らんと欲して 泥は浩蕩
たり

定知高鳳麥漂流 定めて知らん 高鳳の麥 漂流せ
んことを

簷前甘菊已無益 簷前の甘菊 已に益無く

階下決明還可憂 階下の決明 還た憂うべし

安得如鴻六尺馬 安くんぞ得ん 鴻の如き六尺の馬
を

暫時相對說新愁 暫時 相對して 新愁を説かん

第三句は「雨過蘇端(雨に蘇端に過る)」詩(『詳註』卷四)の「藜あかぎを杖つきて春泥はるどろに入る」、第五句は「歎庭前甘菊花(庭前の甘菊の花を歎ず)」詩(『詳註』卷三)の「簷前の甘菊、移せし時はおそ晩く、青蕊 重陽に摘むに堪えず。明日蕭條として酔いは盡く醒め、殘花爛漫として開くも何の益かあらん」、第六句は「秋雨歎」詩(『詳註』卷三)の「雨中の百草 秋に爛れ死す、階下の決明、顔色鮮やかに。……涼

風蕭蕭として汝を吹くこと急なり、恐らくは汝の時に後れて獨り立つこと難きことを」、第七句は「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵士（雨に苦しむ 隴西公に寄せ奉り、兼ねて王徵士に呈す）」詩（『詳註』卷三）の「願わくは六尺の馬を騰せて、背ること孤征の鴻の若くせん」をほぼそのまま襲用する。

詩の内容は、連日の雨で外出もままならぬなか、隔てられた友との再會を願うものに過ぎない。雨の描寫は杜甫の詩を典據とするが、これ以外にも、たとえば「斷送秋」は蘇軾「次韻答邦直子由（次韻して邦直・子由に答う）五首」

其二の「閒作清詩もて秋を斷送す」を踏まえ、きつぱりと秋を送り出す、追いやるの意。高鳳が畑で讀書に没頭するあまり、大雨で麥が流されるのにも氣づかなかつたという故事は「後漢書」逸民傳にもとづくなど、この詩は先行作品の表現を組み合わせた知的操作の産物であり、江西詩派の作詩技法の影響を受けていることは明らかであろう。

五律「雨」（『校箋』卷一三）にも杜甫に學んだ痕跡がはっきりと窺える。

雨の情景（綠川）

沙岸 殘春雨

茅簷古鎮官

一時花帶淚

萬里客憑欄

日晚薔薇重

樓高燕子寒

惜無陶謝手

盡力破憂端

沙岸 殘春の雨

茅簷 古鎮の官

一時 花 涙を帶び

萬里 客 欄に憑る

日晚れて薔薇重く

樓高くして燕子寒し

惜しむらくは 陶謝の手の

力を盡くして憂端を破る無きことを

この詩は、宣和七年（一一二五）春、陳留の南鎮での作。監陳留酒稅に左遷された陳興義の境遇を反映してか、苦々しい憂愁を帯びる。前の詩と同様に、第三句以降は、「春望」詩（『詳註』卷四）の「時に感じて 花、涙を濺ぐ」、「中夜」詩（『詳註』卷一七）の「長く萬里の客と爲る」、「春夜喜雨」詩の「花は錦官城に重からん」、「江上値水如海勢聊短述（江上にて水の海勢の如くなるに値い、聊か短述す）」詩（『詳註』卷一〇）の「焉くんぞ得ん 思い陶謝の如き手を、渠をして述作せしめて與に同遊せん」、「自京赴奉

先縣詠懷五百字（京より奉先縣に赴く詠懷五百字）（「詳註」卷四）の「憂うれ端、終南に齊ひとし」など、いずれも杜詩に由來する表現を巧みに組み合わせたものである。ただし、そうした典據使用は必ずしも露骨に現れておらず、一首全體に自然な統一感が保持されているように思う。清・紀昀『瀛奎律髓刊誤』卷一七に「深穩にして清切、簡齋完美の篇」と絶贊されるとおり、作品の完成度としては前の詩を遙かに上回ると言つてよい。

陳與義の南渡以前の詠雨詩は、典據に杜詩を多用するのみならず、對句に雕琢を凝らした例も多い。たとえば、二十九歳のときの五律「秋雨」（『校箋』卷四）。

瀟瀟十日雨	瀟瀟たり	十日の雨
穩送祝融歸	祝融の歸るを穩送す	
燕子經年夢	燕子 經年の夢	
梧桐昨暮非	梧桐 昨暮 非なり	
一涼恩到骨	一涼 恩は骨に到るも	
四壁事多違	四壁 事は違ふこと多し	

袞袞繁華地 袞袞たり 繁華の地
西風吹客衣 西風 客衣を吹く

第二句の「穩送」は、韓愈「贈劉師服」詩に「匙は爛飯を抄すくいて穩やかに之を送る」と見えるが、恐らく上述の「斷送秋」からの聯想もあるか。夏の炎熱が終わり秋の冷涼へと推移するなか、十日間に及ぶ長雨が夏の神祝融の去るのを穩やかに見送る、と擬人的に表現する。「連雨書事四首」其一（『校箋』卷七）には、晩秋の雨について「九月連雨に逢い、蕭蕭として秋を穩送す」ともいう。

領聯の本文について、『校箋』は『瀛奎律髓』によって「燕子經年別、梧桐昨暮非」と改めるが、ここでは従わなかった。秋になって南方の故郷に歸ることを一年中夢みていた燕、秋の雨に毎晩葉を落とし枯れてゆく梧桐、という動植物のイメージを並置することによって、「詩人の懷舊の思、遲暮の慨」²²を表現しているが、實字の「夢」に對して虚字の「非」を配するなど、かなり破格の對句となっている。

後半の頸聯、ことに上の句の、秋雨によつて天から「一涼」がもたらされ、その「恩」が骨まで染み入るといふ發想も奇抜である。これは恐らく杜甫「又呈吳郎（又た吳郎に呈す）」詩（『詳註』卷二〇）に「已に訴う 徵求せられて貧は骨に到ると」というのを「恩」に轉用したもの。それなのに自分の暮らしは四方に壁が立つのみ（『史記』司馬相如傳）の素寒貧、とアイロニーをにじませる。

對句の技法としては、「涼」と「壁」、「骨」と「違」は嚴密にはそれぞれ文法機能が異なり、字面の上で不齊整であるけれども、二句全體として生硬さを免れている。この點について、劉辰翁（二二三—二二九七）の「劉孚齋詩序」（『須溪集』卷六）に「此れ今人の所爲る偏枯失對なる者なり、安くんぞ知らん 妙意は政に阿堵中に在るを」とあり、陳與義のこの對句を高く評價している。「偏枯」はもと半身不隨のこと。そこから、對句の上句と下句とのバランスに偏りが生じたものを「偏枯對」と稱した。宋代の詩話・筆記の類では對句の技法について熱心に議論されているが、たとえば北宋・蘇籀『欒城先生遺言』（『百川學

雨の情景（綠川）

海』に「東坡の律詩、最も屬對偏枯なるを忌み、一句の善からざる者も容れず」といふ蘇轍（蘇籀の祖父）のことばを書き留めるように、一般的に「偏枯對」は出來の悪い、忌避すべき型と考えられていた。ところが、南宋の慶元から開禧年間頃（二二〇前後）の人、孫弈の指摘によれば、實は杜甫の詩にも「偏枯對」が多用されており、「大手筆の老杜の如きは則ち可なり、然れども未だ白圭の玷爲るを免れず、恐らくは後學 尤に效うべからざらんことを」と、後學の者たちに下手にまねするなと警告を與える。北宋末期にも「偏枯對」は忌避すべきものと見なされていたのだが、新進氣鋭の詩人たる陳與義は通常の規範に反する對句技法にも果敢に挑戦し、一定の成功を収めたのである。以上をまとめると、南渡以前の陳與義は典據、措辭、對句といった作詩の技法面で明らかに江西詩派の影響下にあり、詠雨詩において杜甫を直接に意識した表現を追い求めていたと言える。しかし、筆者の考えでは、彼の作詩の本領はむしろ南渡ののちにこそ發揮されてゆく。

(二) 南 渡 以 後

陳與義は杜甫の詩を祖述の對象とし、模擬的な作品世界を創り出すことに習熟していた。ところが、金軍の南侵による靖康の變を境にして、士大夫官僚としての運命が翻弄されるとともに、杜甫の文學に對する認識も改めることを餘儀なくされたのである。

建炎二年（一一二八）正月、房州（湖北省房縣）に身を寄せていた陳與義は、金軍の侵攻を受けて逃避行をつづける。彼にしては比較的長篇の五古「正月十二日自房州城遇金虜至奔入南山十五日抵回谷張家」（正月十二日、房州城よりして金虜の至るに遇い、奔りて南山に入る。十五日、回谷の張家に抵いたる）（『校箋』卷一七）には、「久しく謂う 事 當に爾かるべしと、豈に意おもわんや 身の之に及ばんとは。虜を避けて三年に連なり、行くこと天の四維に半ばす」とあり、頭のなかで想像してただけの情況が現實に自分の身の上で起こり、各地を放浪すること數年、中國全土の半ばを踏破するほどだと述べたのち、

但恨平生意 但だ恨む 平生の意
輕了少陵詩 少陵の詩を輕了せしことを

と、これまでの杜甫に對する認識が淺かったことを後悔する。もちろん、上に見てきたように、南渡以前の陳與義は杜甫を尊崇こそすれ、決して輕んじていたわけではないのだが、しかし實際に杜甫が味わったような戦亂を體驗してはじめてその文學の眞價に氣づくことができたというのは、彼の僞らざる告白であろう。^④

もう一つ、陳與義自身による杜甫觀を示す史料として、晦齋「簡齋詩集引」（四部叢刊本『簡齋外集』卷首）を挙げよう。

詩至老杜極矣、東坡蘇公・山谷黃公奮乎數世之下、復出力振之、而詩之正統不墜。然東坡賦才也大、故解縱繩墨之外、而用之不窮。山谷措意也深、故游泳「玩」味之餘、而索之益遠。大抵同出老杜、而自成一

家、如李廣・程不識之治軍、龍伯高・杜季良之行己、

不可一概語也。近世詩家知尊杜矣、至學蘇者乃指黃爲強、而附黃者亦謂蘇爲肆。要必識蘇・黃之所不爲、然後可以涉老杜之涯涘。

詩は老杜に至りて極まれり、東坡蘇公・山谷黃公數世の下に奮い、復た力を出だして之を振るい、而して詩の正統は墜ちず。然れども東坡の賦才たるや大なり、故に繩墨の外に解縱し、之を用うるも窮まらず。山谷の意を措くや深し、故に□「玩」味の餘に游泳して、之を索むれば益ますます遠し。大抵 同じく老杜に出で、而して自ら一家を成す、李廣・程不識の軍を治め、龍伯高・杜季良の己を行うが如く、一概に語るべからざるなり。近世の詩家 杜を尊ぶを知れり、蘇に學ぶ者に至りては乃ち黃を指して強^{わりや}と爲し、而るに黃に附く者も亦た蘇を謂いて肆^{ほしさま}と爲す。要するに必ず蘇・黃の爲さざりし所を識り、然る後に以て老杜の涯涘に涉るべし。

引を書いた晦齋なる人物が誰かは未詳。つづく箇所

雨の情景（綠川）

「此れ簡齋陳公の説と云うのみ、予 吳興（浙江省湖州市）に遊びて之を得、乃ち知る 公の學ぶ所は此くの如し、故に能く一代に獨歩するを」と述べる口吻から判斷すれば、陳與義からこの發言を直接に聞いたわけではなさそうである。この引の末尾に「玄戰敦牂（壬午の年）中秋、晦齋書す」とあることから、執筆時期は紹興三十二年（一一六二）か嘉定十五年（一二二二）のいずれかに絞れるだろう。ただし、紹興十二年（一二四二）、陳與義の没後四年にして早くも知湖州の周葵が『陳去非詩集』を刊刻しており、時間的にある程度の隔たりがあると推測される。かりに後者の時期で晦齋と號する人物というのと、あるいは謝直（もとの名は希孟）、字は古民を指すのではないか。謝直は陸九淵の門人にして、淳熙十一年（一一七四）の進士。紹興三年（一一九二）に『簡齋詩箋叙』（四部叢刊本『增廣箋注簡齋詩集』巻首）を書いた樓鑰（一一三七―一二二三）と交遊があることも、陳與義の詩集編纂との關わりを示す傍證になるかもしれない。ともあれ、いまだ推測の域を出ず、博雅の士の指教に俟ちたい。

さて、この記述からわかるとおり、陳與義は杜甫を至上の地位に置くことを前提としたうえで、蘇軾と黃庭堅二人が同じく杜甫を文學の源流としながらも、それぞれタイプ異なる詩人として一家を成したことを大いに稱贊する。

近ごろの詩人たちは蘇軾派と黃庭堅派に別れて互いに「強」だ「肆」だと排撃し合っているが、最も重要なのは杜甫から蘇・黃が發掘し得なかつた部分を認識し、新しい行き方を模索すること、それこそが杜甫に近づく道なのだと説く。

建炎四年（一一三〇）夏頃に作られた七律「觀雨（雨を觀る）」（『校箋』卷二六）は、陳與義には珍しく豪雨の景をうたったものだが、それが社會全體に對する憂患意識へとスライドしてゆくのは、まさしく杜甫の詠雨詩と軌を一にする。

山客龍鍾不解耕 山客龍鍾として 耕を解くせず
開軒危坐看陰晴 軒を開き危坐して 陰晴を見る
前江後嶺通雲氣 前江 後嶺 雲氣を通じ

萬壑千林送雨聲 萬壑 千林 雨聲を送る
海壓竹枝低復舉 海は竹枝を壓して 低く復た舉がり

風吹山角晦還明 風は山角を吹きて 晦く還た明らかなり

不嫌屋漏無乾處 嫌わず 屋漏れて乾ける處無きを
正要群龍洗甲兵 正に要す 群龍の甲兵を洗うを

亂離の苦難を経て、よばよばに疲れ病んだ「山客」――

むろん、陳與義自身の形象――の無力感、倦怠感からうたい起こしながら、激しく吹きつける風雨を視覺と聽覺で感じ取り、その強い力でもって金軍を殲滅したいと夢想するに至る。末尾二句は、言うまでもなく杜甫「茅屋爲秋風所破歌（茅屋 秋風の破る所と爲る歌）」の「床床 屋漏れて乾ける處無し」、および「洗兵馬」の「安くんぞ得ん 壯士天河を挽き、淨らかに甲兵を洗いて長えに用いざるを」を踏まえた表現。典據使用は極力控えめにしつつ、豪雨の描寫で精神を昂ぶらせ、最後は杜詩の引用をもって結ぶダイ

ナミツクな展開は、南渡以前に見られない力感溢れるものとなつてゐる。

次に擧げる五律「雨中」〔『校箋』卷二九〕は、紹興元年（一一三二）、ようやく會稽（浙江省紹興市）の高宗の行在所に馳せ參じて、その年の暮れを迎えたときの作。

北客霜侵鬢 北客 霜 鬢を侵し

南州雨送年 南州 雨 年を送る

未聞兵革定 未だ兵革の定まるを聞かず

從使歲時遷 歲時をして遷らしむるに從まかず

古澤生春靄 古澤 春靄生じ

高空落暮鳶 高空 暮鳶落つ

山川含萬古 山川 萬古を含み

鬱鬱在樽前 鬱鬱として樽前に在り

第三句は杜甫「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老
（岳州の賈司馬六丈、巴州の嚴八使君兩閣老に寄す）五十韻」
〔『詳註』卷八〕の「甘んじて歲時と與ともに遷うつる」にもとづく

雨の情景（綠川）

が、單なる字句の模倣にとどまらない。むしろ社會に對する憂患意識を抱きながら、具體的な時事をそのまま悲しみに歎くのではなく、象徴的な表現によつて描き出そうとする點において、先に論じた「西閣雨望」詩など杜甫晩年の詠雨詩に酷似する。

五年餘に及ぶ流浪生活に終止符を打つたものの、金軍の侵攻による戰亂はなお收束せず、歲月はただ移りゆくまゝ。とは言え、ここに創り出された雨の世界はすでに陳與義個人の悲哀を超越し、永遠の悲哀へと昇華するかのようである。雨は空間全體を包みこむだけでなく、「萬古を含」む無限の時間にわたつて降り注ぐ。老詩人は、永遠にこの雨の中に身を置きつづけるがごとく、酒を前にして獨り佇むほかない。「中原 未だ兵を解かず、吾 疎放に終わるを得たり」とつぶやいた杜甫ならば、もつと自嘲氣味に苦悶してみせるかもしれないが、陳與義のこの詩は深く靜かな悲しみを湛えている。

南渡以後の陳與義は江西詩派のエピゴーネンたることを放棄し、「蘇・黃の爲さざりし所」を目指して、それを實

踐に移していた。友人の葛勝仲（一〇七二—一一四四）が周葵刻本のために執筆した「陳去非詩集序」（『丹陽集』卷八）には、陳與義晩年の詩のスタイルが「新體^㉔」と稱され、朝野に廣く流行していたことを記す。

會兵興搶攘、避地湘・廣、汎洞庭、上九疑・羅浮。

雖流離困厄、而能以山川秀傑之氣益昌其詩、故晩年賦

詠尤工。搢紳士庶爭傳誦、而旗亭傳舍摘句題寫殆遍、

號稱「新體」。

兵興りて搶攘たるに會い、地を湘・廣に避け、洞庭

に汎^{うか}び、九疑・羅浮に上る。流離困厄すと雖も、能く

山川秀傑の氣を以て益すます其の詩を昌^{さか}んにす、故に

晩年の賦詠は尤も工みなり。搢紳士庶 争いて傳誦し、

旗亭傳舍にて句を摘み題寫すること殆ど遍く、號して

「新體」と稱せらる。

上述のとおり、詠雨詩に限ってみても、陳與義の南渡以後の作品は杜甫晩年の象徴的な表現に學びつつ、彼獨自の

詩の世界を切り拓こうとして到達した境地であった。南宋初期の詩壇にあつて、それは「新體」と稱するにふさわしいものであつたのだらう。

結びに代えて

陳與義には、孤獨に詩を作るみずからの姿を投影した七絶「石限病起（石限にて病より起く）」（『校箋』卷二六）という作品がある。

幽人病起山深處 幽人 病より起く 山深き處

小院鴉鳴日午時 小院に鴉^{かき}鳴く 日午の時

六尺屏風遮宴坐 六尺の屏風 宴坐を遮り

一簾細雨獨題詩 一簾の細雨 獨り詩を題す

「六尺の屏風」に遮られた狭小の空間に身を置きながら、雨のそほ降る外界を繊細に感受し、それを詩に表現しようとする。いみじくも「寺居」詩（『校箋』外集）に「物象は自ら客眼に供するに堪ゆ、未だ須^{もち}いず 句を覓^{もと}めて 戸

長に肩つねざる」というように、修辭の鍛錬によつて詩句をこしらえるのではなく、外界の「物象」が己に提供されることよつて、詩はおのずと生まれる。陳與義にとつて、雨こそはまさしく格好の「物象」であつたにちがいない。詩作という行爲をこのように捉えようとする認識は、黃庭堅が陳師道（字は無已）の苦吟ぶりについて述べた「門を閉ざして句を覓むるは陳無已」（病起荆江亭即事十首）其八のいわば反措定であり、次世代の詩人、楊萬里が「門を閉ざして句を覓むるは詩法に非ず」（下横山灘頭望金華山）詩と道破し、江西詩派の影響を乗り越えたのを先取りするものと言えよう。

陳與義の創り出した「新體」の「新」なる要素は他にないのか。南宋になつて詠雨詩を多作するのは陳與義に限らないが、呂本中・曾幾など同時代の他の詩人の情況はどうか。實は、杜甫の詠雨詩との影響關係にしても、本稿では論じきれなかつた重要な問題がなお幾つか積みかさされている。それらについては、あらためて別稿を準備したい。

雨の情景（緑川）

註

- ① 吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波書店、一九六二年、中國詩人選集二集）序章第十二節「宋詩における自然」、六三頁。
- ② 前掲、吉川氏『宋詩概説』序章第八節「唐詩と宋詩」、四五頁。
- ③ たとえば、小川環樹『陸游』（筑摩書房、一九七四年、中國詩文選）「靜寂・默想・雨」、三野豊浩「雨の詩人 陸放翁」（『文學論叢』第一一六輯、愛知大學文學會、一九九八年）、陳平「楊萬里の自然描寫——『雨』を中心に——」（『京都産業大學論集』人文科學系列第二九號、二〇〇二年）など。
- ④ 『瀛奎律髓』卷一七・晴雨類に曾幾の五排「秋雨排悶」を収めるが、作者は陸游の誤りと推測される（錢仲聯『劍南詩稿校注』卷一五、上海古籍出版社、一九八五年、一一八一頁）。とすれば、晴雨類に採られた陸游の詩は計八百。
- ⑤ 梁・鍾嶸『詩品』序に五言詩の秀作を列舉して「景陽（張協の字）の苦雨」というのは、張協「雜詩十首」其十を指すとされる。
- ⑥ 六朝の詠雨詩については、矢嶋美都子「庚信研究」（明治書院、二〇〇〇年）第三章第四節「一 六朝時代の『喜雨』詩について」、および第四章第一節「二 六朝時代の雨の詩に見る雨に對する認識」、一六二—一九一頁を参照。
- ⑦ 杜甫の作品の引用は、宋本『杜工部集』（『續古逸叢書』）

を底本とし、檢索の便のため、あわせて『杜詩詳註』の卷數を記す。

- ⑧ たとえば、蘇軾「遊張山人園」詩に「織織入麥黃花亂、颯颯催詩白雨來」、同「行瓊・儋間、肩輿坐睡……」詩に「急雨豈無意、催詩走群龍」など。同様の詩學認識として、晚唐の齊己「新秋雨後」詩の「夜雨洗河漢、詩懷覺有靈」など、杜甫の詩を直接の典據としない例も散見される。

- ⑨ 吳在慶「杜甫詠雨詩芻議」(唐代文士與唐詩考論、廈門大學出版社、二〇〇六年)、二四五—二四八頁。初出は「閩江學院學報」二〇〇三年第一期。

- ⑩ 杜詩における「安得」の句法の機能については、南宋の孫奕『履齋示兒編』卷一〇・詩說「安得」條(『知不足齋叢書』)にすでに指摘されている。

- ⑪ 南宋・蔡夢弼『杜工部草堂詩箋』卷一一の引く漢・劉向「說苑」に「武王伐紂、風霽而乘以大雨。散宜生又諫曰、此非妖歟。王曰、非也、天洗兵也。ただし、現行本の『說苑』權謀では「洗」を「灑」に作る。

- ⑫ 仇兆鰲注に「菊逢雨打、其疏散也凄然。雨罩松青、見遠情之遙託。二句俱寫雨景。遠情指松、蓋蒼翠可愛處。宛然具有情致。駐、停駐也。

- ⑬ 錢謙益『錢注杜詩』卷一一に「向秀『思舊賦』、嵇志遠而疎、呂心曠而放。瞽者唐仲曰、杜詩每云疎放、蓋本于此」。瞽者唐仲は、明・唐汝詢、字は仲言のこと。

- ⑭ これ以外に杜甫自身を「疎(疏)放」と稱した例は、「尊榮瞻地絕、疎放憶窮途」(「奉寄河南韋尹丈人」詩、「詳註」卷一)、「客禮容疎放、官曹可接聯」(「奉贈嚴八閣老」詩、「詳註」卷五)。

- ⑮ 鈴木虎雄『杜少陵詩集』第四卷(國民文庫刊行會、一九三一年、續國譯漢文大成)、六七三頁。鈴木氏の譯解は、恐らく仇兆鰲注が「思及中原多故、得終疏散於江湖否耶」と反語に取るのを襲ったもの。

- ⑯ 王嗣爽「杜臆」卷八に「最妙在結語、濕朱檻者雨也。滂沱如羈客之淚、故知萬慮不離簷楹耳。慮多故淚多」。

- ⑰ 陳與義の作品を引用するにあたり、白敦仁『陳與義集校箋』(上海古籍出版社、一九九〇年)を底本とし、その卷數を示す。ただし、胡釋『增廣箋注簡齋詩集』『簡齋外集』(『四部叢刊』)、劉辰翁『須溪先生評點簡齋詩集』(『和刻本漢詩集成』第十五輯)、方回『瀛奎律髓』などを参照して字を改めた箇所もある。陳與義の事蹟・作品繫年については、白敦仁『陳與義年譜』(中華書局、一九八三年)に従った。

- ⑱ 方回『瀛奎律髓』卷二十六・變體類、陳與義「清明」評に「古今詩人當以老杜・山谷・後山・簡齋四家爲一祖三宗。同『送兪唯道序』(『桐江集』卷一)にも「大概律詩當專師老杜・黃・陳・簡齋」など。

- ⑲ 錢鍾書『宋詩選注』(人民文學出版社、一九五八年)「陳與義」、一四六一—一四七頁。

⑳ 陳與義の詠雨詩に關する先行研究として、趙齊平『宋詩臆說』（北京大學出版社、一九九三年）所收の「急搜奇句報新晴——說陳與義《雨晴》」「霧澤含元氣 風花過洞庭——說陳與義《雨》」、王友勝・許菊芳「陳與義詠雨詩初探」（湖南文理學院學報（社會科學版）二〇〇六年第四期）などがある。また、横山伊勢雄「陳與義の詩と詩法について」（『宋代文人の詩と詩論』、創文社、二〇〇九年。初出は『人文科學研究』第七十四輯、新潟大學人文學部、一九八九年）にも部分的に言及される。

㉑ 張相『詩詞曲語辭匯釋』卷五（中華書局、一九七七年）六八七頁には、「斷送」の語義を五項目に細分したうえで、陳與義のこの用例について「猶云推送之送或迎送之送也。……言風雨推送秋來也」というが、やはり「斷」の持つ「きっぱり」というニュアンスを帯びるのではないか。ここは、釋大典『詩家推敲』卷下に「俚語ニイフ仕舞てまツケル意ナリ」という釋義にくみしたい。

㉒ 近人による唐宋詩比較論として名高い繆鉞「論宋詩」（『詩詞散論』、上海古籍出版社、一九八二年、初出は『思想與時代』第三期、一九四一年）は、唐の李商隱「細雨」詩と比較しつつ、この詩の詠雨表現を緻密に分析している。

㉓ 孫弈『履齋示兒編』卷九・詩說「偏枯對」條に「詩貴于的對、而病于偏枯。雖子美尙有此病」と述べ、杜甫の詩のなかから十八聯の具體例を列擧するが、ここでは省略に従う。

雨の情景（綠川）

㉔ 「正月十二日自房州城……」詩一首全體の解釋については、中尾彌繼「陳與義の南渡」（『中國言語文化研究』第五號、佛敎大學、二〇〇五年）、二九—三三頁を參照。

㉕ 陳與義の「新體」について、南宋の陳善『捫蝨新話』卷八・詩類（『津逮祕書』）では、若い頃の出世作「墨梅」詩と結びつけた異説を提出している。ただし、陳善自身はそれが「東坡の句法」を「奪胎」したスタイルだと言うのみで、必ずしも贊否は明確でない。

附表：陳與義詠雨詩一覽

番號	詩題	制作時期	地點	詩體	卷數	律髓
1	風雨	政和七年秋	洛陽	五古	卷三	
2	秋雨（瀟瀟十日雨）	政和八年秋	汴京	五律	卷四	○
3	夜雨	政和八年秋	汴京	七律	卷四	○
4	連雨不能出有懷同年陳國佐	政和八年秋	汴京	七律	卷四	
5	連雨書事四首 其一	宣和三年秋	汝州	五律	卷七	○
6	連雨書事四首 其二	宣和三年秋	汝州	五律	卷七	○
7	連雨書事四首 其三	宣和三年秋	汝州	五律	卷七	○
8	連雨書事四首 其四	宣和三年秋	汝州	五律	卷七	○
9	某以雨有嘉應…… 其一	宣和三年秋？	汝州	七絕	外集	
10	某以雨有嘉應…… 其二	宣和三年秋？	汝州	七絕	外集	
11	秋雨（塵起一月）	宣和四年秋	汴京	七古	卷一〇	
12	雨晴	宣和五年秋	汴京	七律	卷一一	○
13	試院書懷	宣和六年春	汴京	五律	卷一一	○
14	浴室觀雨……	宣和六年夏	汴京	五古	卷一一	
15	雨（沙岸殘春雨）	宣和七年春	陳留	五律	卷一三	○
16	八關僧房遇雨	宣和七年夏	陳留	五古	卷一四	
17	雨中觀秉仲家月桂	靖康元年春	南陽	五律	卷一五	
18	春雨	靖康元年春	南陽	五律	卷一五	○
19	雨（忽忽忘年老）	靖康元年夏	南陽	五律	卷一五	○
20	夏雨	靖康元年夏	南陽	五古	卷一五	
21	積雨喜晴	靖康元年秋	南陽	五古	卷一五	
22	雨晴徐步	建炎二年春	房州	五古	卷一八	
23	岸幘	建炎二年春	房州	五律	卷一八	○

雨の情景（緑川）

47	雨過	?	?	七絶	佚詩	
46	微雨中賞月桂獨酌	紹興八年秋	湖州	七絶	卷三〇	
45	黃修職雨中送芍藥五枝	紹興六年春	湖州	五古	卷二〇	
44	雨中（北客霜侵鬢）	紹興元年冬	會稽	五律	卷一九	○
43	雨（聽雨披衣襟）	紹興元年冬	會稽	五古	卷一八	
42	喜雨	紹興元年秋	會稽	五古	卷一八	
41	雨中宿靈峯寺	紹興元年春	雁蕩	七絶	卷一七	
40	雨中再賦海山樓	紹興元年春	廣州	七律	卷一七	
39	愚溪	建炎四年秋	永州	五律	卷一七	○
38	觀雨	建炎四年夏	貞牟	七律	卷一六	○
37	雷雨行	建炎四年夏	貞牟	七古	卷一五	
36	雨（雲物澹清曉）	建炎四年春	貞牟	五律	卷一四	○
35	晚步	建炎四年春	貞牟	五律	卷一四	○
34	正月……十三日夜暴雨滂沱	建炎四年春	邵陽	七古	卷一四	
33	立春日雨	建炎四年春	赴邵陽	七律	卷一四	
32	道中	建炎四年春	赴邵陽	五律	卷一四	○
31	雨中（雨打船篷）	建炎三年夏	岳州	七絶	卷一二	
30	晚晴野望	建炎三年夏	岳州	五律	卷一二	○
29	細雨	建炎三年夏	岳州	五律	卷一二	○
28	雨中對酒庭下海棠經雨不謝	建炎三年春	岳州	七律	卷一〇	○
27	雨（霏霏三日雨）	建炎三年春	岳州	五律	卷一〇	○
26	欲離均陽而雨不止……	建炎二年秋	均陽	七古	卷一九	
25	觀江漲	建炎二年夏	均陽	七律	卷一九	○
24	雨（雲起谷全暗）	建炎二年春	房州	五律	卷一八	○

- ・詩題・卷数は白敦仁『陳與義集校箋』による。
- ・作品の繫年・地點は白敦仁『陳與義年譜』の考證に従う。
- ・「律髓」の○印は元・方回『瀛奎律髓』に収録されていることを示す。